

なのはな通信

第9号 2002.12



編集・発行

勤医会東葛看護専門学校

〒270-0174 千葉県流山市下花輪409

TEL 04-7158-9955 FAX 04-7159-7055

発行責任者 小澤 清子

研修旅行1科・2科合同発表会



「思いをはせる」感性を

校長 三上 満

十月、一科三年生は中国へ、二科二年生は韓国へそれぞれ研修旅行に旅立った。私は二科に同行することになり、三泊四日の韓国（ソウル）の旅を学生とともにした。

その中でひとつの忘れられない体験をした。戦争中、日本軍につれ去られ慰安婦とされた女性（ハルモニ）たちの、日本大使館前の坐りこみ抗議に参加したのである。ハルモニ（朝鮮語で祖母）たちは、雨の日も雪の日も毎週水曜日に、日本政府による公式の謝罪と補償を要求して坐りこみを続けてきた。その日は五三回目の行動の日であった。日本政府は、何万の女性を強制連行し、アジア各地で日本兵の慰安婦とさせたことを、いまだに公式に謝罪していない。その上ハルモニたちの生活支援のために「民間基金」という慈善事業まがいのことでお茶をにがしている。その日も女性の尊厳を傷つけられ青春をうばわれたハルモニたちの怒りが日本大使館を包んでいた。

集会が解散した直後に一人のハルモニが、怒りのこぶしをふりあげて、私たちに向って叫びはじめた。韓国語の早口で意味はわからないが「イルボン〜」という語は何度も聞こえた。イルボンとは日本のことである。

ボランティアの通訳の人が血相変えたハルモニをしずめてくれ、私たちに説明してくれた。そのハルモニは、「日本ではあれだけ拉致について問題にしているが、なぜ、私たちが受けた拉致については、何の謝罪も補償もしないのか」と、繰り返して叫んでいたのである。私が「そういう事実を若い学生が学ぶことが未来につながるかと考えてやってきたのだ」と話すと、ハルモニはようやく納得し、笑顔で私にも学生にも握手をしてくれた。

「かつて日本もやった」といって北朝鮮政府関与の拉致の責任を軽くすることはもちろん許されない。同時に、日本国民、とりわけ若者の歴史認識として、かつて日本が行った無数の拉致に対して思いをはせることがなければならぬ。その豊かなイマジネーションがあつてはじめて、平和なアジアの一員と二十一世紀を歩むことができるのだ。そのことを強く知らされた韓国の旅であった。

原水爆禁止世界大会

2002

私は原水禁世界大会に、とても行ってみたいと思っていました。世界中から平和を願う人達が、広島という戦争を象徴する地に集まります。そこで戦争や原水爆をなくすにはどうしたらよいか殆ど何も知らない私も学べたらいいなと思ひ、広島へ行きました。

印象に残ったことは、私と同世代の人達の多さと行動力です。参加した分科会では日本、海外の若者の発言で、今、世界で起こっている悲しい出来事について、「こんなのは嫌だ」と思う気持ちから、皆各々の方法で行動していることです。私は世界がどんな風に動いているのかを知るには、多くの勉強をしなければならないと思つて、考える事を後回しにしてみました。しかし、この大会で多くの同世代の人達が、広い視野で物事を見て発言している事が刺激となりました。自分の中



から出た疑問をそのままにせず、そこから勉強をしていけば自分が何をすべきかが見えてくるかもしれないと思います。

経済的根拠を求めていくという話は興味深く、例えばアメリカが世界中に反対されても核兵器を減らさず戦争を行うという事の理由にも、必ず経済的なことが関係していて、それを知らないとな全体的な事実をつかめないということです。この事を初めて知り、これから勉強していこうと思ひました。

今回参加して、自分に何が出来るかはつきりとはわからなかったけれど、今でも残されている戦争の傷跡や世界各国から来た人達との交流により普段の生活している風景が少し変わった気がしています。今も戦争やその火種が当たり前のよう

に転がっていて虚しくなりますが、これから社会を構成していく世代として自分たちが変えていかななくては、と思ひました。

(1科1年 小仁所 麻子)

第5期学生自治会 「忙しい中にもやすらぎを」

学生自治会も五期目がスタートしました。一年生が多い自治会で、分からないこと、戸惑うことがたくさんあると思いますが、前期役員であった先輩方いろいろな指導してもらい、みんなで頑張っていきたいと思ひています。

具体的な活動を始める前にまず自治会役員で、私たちがどういう活動をしていくのかを話し合い、テーマを決めました。勉強・実習など学校生活は忙しいけれど、そんな忙しさの中でも学校が落ち着く場所・楽しい場所であればいいなあと

いう思いから「忙しい中にもやすらぎを」をテーマにしました。学生の皆さんから「学校のこんな所を良くしてほしい」などの意見・要望をいっぱい出してもらい、学校と話し合いを行い、学生がゆつたりと生活できるようにするよう、少しでも改善できればいいなと思ひています。皆さんからの学校への意見・要望、自治会への意見・要望をどしどしお持ちしています。何かあったら各クラスに置いてある意見箱に意見等を書いて入れて下さい。

自治会がどのような活動をしているのかよく分からないという学生がいると思ひますが特別なことはやっていません。



自治会はあくまで学生の代表です。もつと自治会を身近に感じて下さい。今、自治会と皆さんの間に距離があると思ひます。その距離を少しでも縮められるようにしたいと思ひています。

私たちがどんな活動をしているのかを新聞でお知らせしたいと思ひています。皆さんと力を合わせて頑張っていきたいと思ひていますので、新役員一同よろしくお願ひします。

(自治会会長 利行 理子)

第5期自治会役員

会長	利行 理子	(1科1年)
副会長	市原 伸子	(1科2年)
書記	清水 康博	(1科1年)
	鄭 堅桓	(1科2年)
会計	中川 圭	(1科1年)
	加藤 ゆき	(1科1年)
	小澤 弘規	(1科1年)
会計監査	荒木 久美子	(1科1年)
	安藤 裕子	(1科1年)
庶務	篠原 美希	(1科2年)
	田島 鮎香	(1科1年)
	池田 素子	(1科1年)
	菊地 政紀	(2科1年)

第8回 東葛祭

~ NEVER GIVE UP
流山魂 ~

勤医会東葛看護学校第八回東葛祭は、十月五日（土）六日（日）に開催されました。

今年のテーマは、アンケイトをとり、実行委員で話し合い、「東葛祭」NEVER GIVE UP 流山魂」に決まりました。これには、日々勉強や実習で根をあげず、がんばっている学生達が流山の皆様と一緒に作りあげていこうという思いが込められています。

そのため、流山地域の多くの方々に東葛祭を知ってもらおうと、チラシを各々のお宅に配布することになりました。放課後や、準備日を使つてのチラシ配りは、各企画毎に縦わりになっていた事もあり、学年をこえて交流し合うよい機会になりました。

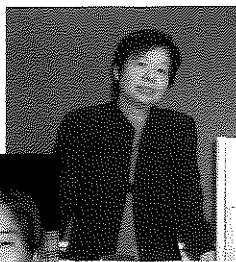
東葛祭一日目は、学生達が戦争に



ついて学びたいという思いから、児童文学者の岸川悦子さんによる満州に住んでいた当時の体験談を語って頂きました。「えっちゃんのせんそう」の著者である岸川さんは、学童時代の場面を再現してくれるかのように、わかりやすく語ってくださいました。学生達は、敗戦によって戦争が終わったという思いから、「満州に住んでいた人々は、そこから戦いだっただ」ということを聞き、知らなかつた事実を聞く事ができ、とてもよい学びになりました。戦争中、日本の軍隊は中国人に対して、残虐なことばかりしていました。岸川さんは幼いながら「同じ人間なのになぜ、平等ではないのか？」と疑問に思っていた

とおっしゃっていました。しかし敗戦後、中国の方は優しく、日本人に物資がまわらなくなった時、食料に困っているだろうと、食料を差し入れてくれたり、何も言わずに食料を置いていってくれたりしてくれました。中国では「罪を憎んで人を憎まず」の精神で敗戦後、日本人に接してくれた事を学ばせて頂きました。また、一科三年生は研修旅行で、満州国のあつたハルビンに行くことになつていたため、事前学習にも繋がりました。

二日目は、全学年の協力で流山の多くのお宅にチラシが配られたため、六〇〇人も来客者がありました。例年恐いと評判のおばけ屋敷では、「リング」を再現し、井戸の中から出てくる場面では、あまりのリアルさに、退場する子が続出しました。グリラの協力を得たカレーなどの食堂、大きくてほっかほっかのじゃがバター、紙コップからこぼれ落ちそうなフルーツ白玉ぜんざいの出店などが好評でした。平和ゼミナールで学んでいた教科書問題、七三一部隊の学びをモデルにして作られた「黒い太陽」上映も行い、地域の方々にも頂いた事で、七三一部隊を知らなかつた人達に、知る機会につながりました。



後夜祭は、毎年有志による企画で盛り上がりますが、今年も例年どおりダンス・ダンス・ダンスで盛り上がりました。朝練を重ねていたという、若手教員と三年ダンス部によるスベード、まだまだいける女子高生姿で踊ったあやや、ダンス部の完璧の武富士、男子学生服を着ての氣志團、ギターによる弾き語りなど、とても盛り上がりました。毎年大変な片付けも、学年で役割を決める事でさんなり終わった第八回東葛祭でした。また、地域の方々にたくさん来ていただき、成功裏に幕をおろしました。

（第8回東葛祭実行委員長

小柳 史江）



キャッピング セレモニー

～2002 秋
決断式～

十一月三〇日 八期生キャッピング
セレモニー開催

八期生は入学当初から元気になるし、有事法制反対の集会、原水爆禁止世界大会への参加など積極的に取り組んできました。そんな彼らも、クラスやグループではなかなか話し合いが出来ないのが悩みの種：

しかし、十月の基礎実習のゼミをとおして大きく成長してきました。ゼミでは活発に意見交換でき、他のグループの学びを自分のものとして聞き、皆で学びあえました。仲間の意見を聞き、ディスカッションするなかで自分達のレポートを客観視でき、自分の学びも深められました。

そんな体験からキャッピング実行委員会は、みんなです話し合い、考える過程に意義があると位置付け、自ら創りあげるセレモニーにむけ、学校での合宿など討議を開始しました。「自分達は本当に看護師になれるの

か・キャッピングをうけていいのか」という不安から始まり・・・しかし、今の自分を在りのままに受け入れていいのではないか。不安を持ちながら看護師に成長していこう・・・キャッピングはそのスタート台に位置づけよう、キャンドルの炎は決意と不安の象徴。

話し合いをとおして「看護師もいろいろあつていいのでは、みんな違ってみんな良い」と決意表明に つなげました。そして、仲間の中で何でも話し合えることで、自分自身の存在意義を再確認し、人間としてもおきな成長のスタートとなるセレモニーを作り上げました。

「こんな気持ちのままキャッピングに参加していいのかためらいもあつた。クラスで学びを共有したことで自分達の成長を確認できた・・・誰の話でも真剣に聞けるこのクラスで、自分の意見も言えるようになってきた。」(決意表明より)

担任の呼名のあと、クラスのみんなが、いつせいに愛称を呼ぶ。緊張した顔が一瞬ほころび、はにかみながら仲間に向けて返事をする。仲間とともに学びあい、教員が後押しする意味で、ナースキャップはクラスメイトが前を、教員が後ろをピンで

留める。

自分達の学んだことを伝えようと、何十時間もかけて練りあげ、クラス討議でつくった決意文を全員で読みあげる。緊張感より、気迫が伝わってくる。

式の直前まで練習していた歌「Brand New Myself 僕にできること」はステップを踏みながら肩をくみ、ときどき音楽とずれても、満面の笑顔でうたいきり、八期生ひとりひとりがキャッピングを満喫している様子でした。

セレモニー終了後の父母懇談会でも、約半年間の学生達の成長を確認することができました。「この学校に入学してか娘が一八〇度変わって積極的になった」「家に帰ってか何時間も机に向かっている。真剣に看護師になりたい熱意が伝わって来る」など。



「Brand New Myself 僕にできること」はステップを踏みながら肩をくみ、ときどき音楽とずれても、満面の笑顔でうたいきり、八期生ひとりひとりがキャッピングを満喫している様子でした。

本格的な学びはこれからです。このキャッピングセレモニーへの取り組みをとおして、集団で学ぶ確実な土台を造ることができました。学生達が躓きそうになったときは、ご家族の方とも力を併せて支えていけたらと思っています。

(1科1年担任 生田 知歩)

8ヶ月間の
学び
—学生の姿から

合宿 & 患者さん宅訪問の
グループワーク

入学してまだお互いの顔も名前も一致しない中で、突如グループワークが始まります。在宅で闘病する患者さんのお宅を訪ね、その内容をレポートに作り上げ、みんなの前で発表！「これが先輩が言う、めっちゃ大変なグループワークというやつですか！」と恐怖と共に充実感も味わいながら納得しました。しかもそのまま学校に合宿するのです。この驚きといったらありません。まだよく知らない同士が同じ屋根の下（体育館）に泊まって、丸一日一緒に過ごすなんて、合宿を迎えるまでは憂鬱で仕方ありませんでした。ところが、実際は、結構できちゃうものなのです。食事係・レク係などの役割分担も、作業を通してだんだんお互いを知り、楽しくなり、しかも凝ったものを作りたいくなるのです。そんなわ



けて、この強化合宿がきっかけで、楽しく学校生活をスタートさせました。

授業

本格的に授業が始まると、そのスピードに驚きました。でも、新鮮に学ぶ喜びを感じます。今まで、知ったつもりになっていたことが、「実はこういうことだったのか」という学ばは、シヨックとともに、喜びを感じます。

田植え・森の草刈り!

生命活動を知るための授業の一環で、田植えや関さんの森の草刈りをしました。足袋をはいて田んぼに入った時には、「キヤー!」「気持ちわ

るいー!」「ここは農業学校かー!」と悲鳴が…。しかし慣れてくると結構楽しいものです。みんな（学生の連れてきた子供二人を含む）で横一列になって、ゆっくり丁寧に苗を植えていきました。このとき植えた苗が9月には立派に育ち、たわわに実った穂をたれて田んぼを金色にしていきました。稲を刈り、収穫したお米はなんと三俵半。このお米は、東葛祭で食べていただきました。もちろん自分たちも収穫祭をし、美味しく食べました。

生命活動研究

人間の体がどういう構造と仕組みで生きているのかを学ぶために、8つの系統に分けて学びました。自分たちで文献を検索し、読みあさり、「人にわかるようにこれを伝えるにはどう表現したらいいか」と悩みながらまとめていく、辛く厳しい学びです。しかし、理解したときの感動も大きいのです。人間の体のしなやかで合理的な仕組みも知れば知るほど驚き、その体を持つ私達の命に愛しさと尊敬と「大切にしたい」という感じがするのです。

それまで受けてきた化学や物理の授業は、「本当に看護に関係あるの?」という気持ちがありました。人間

の体の仕組みや、病気について本当に理解しようとした時に、「ああ、化学や物理って大事なんだな!」と初めて思いました。バラバラに得てきた知識がだんだんつながっていくと、「いろんなことを知りたい」「看護師としての力も、そして自分が生きていくための力もつけたい」と思えます。

生命活動研究を一緒にやったグループメンバーたちと、初めての基礎実習に行きます。学生はこの実習でますます「大変だけど、わかっつうれい!」を増やしていきます。

私も学生達から学び、学生と一緒に成長していけたらと思います。

(2科1年担任 越川 江美)



と医療」を学ぶ旅

1科6期生 中国へ

私達、一科六期生は、被害国日本だけでなく、加害国日本のことを知りたいと思ひ、研修旅行の行き先を中国にしました。広大な中国の中でハルピンを含む東北地方に決めたのは、七三一部隊の跡地がある場所だったからです。七三一部隊では細菌兵器を作り出すために中国人やロシア人を「マルタ」と呼び人体実験を行いました。事前学習で『黒い太陽』という生々しい人体実験のビデオを見たリ、元七三一部隊の少年兵だったS氏と人体解剖を行った元軍医のY氏からお話を聞きました。戦時中は人権を無視し、人の命を救う為の医療が効率よく敵の兵士を殺すための医療として扱われたことを学び、5泊6日の中国への旅へ出発しました。

実際に七三一部隊の跡地に立ち、当時の事を説明するパネルを見ていたら、実際に経験したわけでもないのに頭の中に恐ろしい情景が浮かんできました。この時代に生まれて自分たちも平気で同じことができてしまうかもしれないと思いました。

撫順の平頂山惨劇記念館、北京の抗日戦争記念館も見学し、なぜここまで残虐行為が行えたのかと疑問を持ち旅を終えました。

旅行後クラスで学びを深め、教育・法律・政治経済が密接に戦争と関わっていて、人を平気で殺してしまうのがあたりまえな時代が築き上げられていたことを知りました。

また、今の時代が教育・法律・政治経済面で、再び戦時中の体制を繰り返す政策がすすめられていることを学びました。私達が実際に見てきた中国への残虐行為は事実であり、二度と繰り返してはいけなないと思いました。

この学をもとに、来年度から臨床に出て医療従事者として、社会情勢に目を向け、人の命を守る看護を実践し



ていきたいと思ひます。

中国では、バスタブの水があふれたり、トランクが開かなかつたりとトラブル続きだったけれど、広大な万里の長城に登ったり、値切つて安い買物をしたりと楽しい思い出も三十九名、プラス教員四名と一緒に忘れられない思い出をつくることができました。

(1科6期生 刀瀬 真弓)



「日本国憲法と平和」

2科7期生 韓国へ

十月八日から十一日研修旅行で韓国に行きました。研修のテーマは「平和と医療」です。

初日はグリーン病院を視察し、現場の看護師と日韓の医療制度の違いなどについて語り合い、交流会では練習していった「統一の歌」を肩を組んで歌い盛り上がりました。心尽くしの夕食は美味しく、感激しました。翌日から事前学習にそって統一展望会・自由の橋・西大門刑務所跡地・タプコル公園・ナヌムの家・景福宮などを訪ねました。

元従軍慰安婦達が共同生活しているナヌムの家では、実際に証言を聞くことが出来、想像を絶する内容に涙が止まりませんでした。ボランティアの方が作ってくれた昼食もご馳走になりました。元慰安婦であるハルモニ（韓国で親しみを込めて呼ぶおばあさんのこと）達は、幾つもの思いが刻まれたシワシワの手で、私達の手を優しく握り涙を拭いてくれました。別れ際までずっと手を握り、バスに乗っても手を振って見送ってくれた姿は、忘れられません。

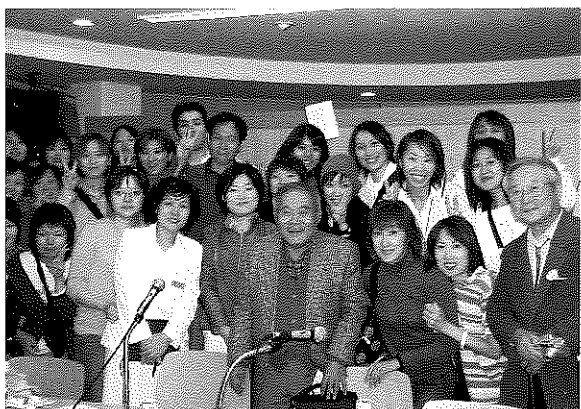


韓国でのもう一つの楽しみである食事・観光も満喫しました。こちらでも事前学習（？）したチヂミ・トッポギ・冷麺・焼肉・マッコリなどを食べたり、エステや買い物を楽しんだり、地下鉄やタクシーに乗ったりもしました。クラス交流会ではグループごとに準備してきたネタを披露し、仲間の意外な「才能」を発見、終始爆笑の渦でした。また三上先生の歌ではクラス全員が踊り出し、韓国の夜は更けていきました。

春休みの事前学習に始まり今回の4日間の研修旅行までを終えて学んだことは、戦争は多くの人々に悲し

み・怒り・憎しみを残しただけであるということ。事実を知るという事は、過去を知るという事です。二度と戦争をしない平和な未来にするために、私達は正確に歴史を伝えていかなければならないと学びました。また私達自身、様々な情報・ニュースに惑わされず、今何が起ころうとしているのか見極める力をつけることが大切だと感じました。カムサハムニダ・韓国!!

（2科7期生 蜂須賀 綾子）



医療費負担増は凍結・見直しを —いのちを削る痛み現実—

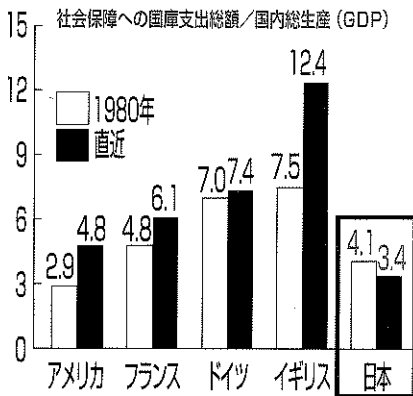
世論調査でも国民の六割が反対し、三千万人の医療改悪反対署名や、六百を越える自治体の「反対意見書」の採択にもかかわらず、「医療改悪法」が強行採決されました。

本年四月に改定された診療報酬は、戦後初めての引き下げであり、本校の所属する東京勤医会では年間五億円の収益低下をもたらすという大改悪でした。内容には様々な不当な引き下げがありますが、その中で腎臓疾患の透析治療の点数が引き下げられた上に、食事提供加算が廃止されました。透析食は包括点数に含まれるということで、一般食は外部業者などから有料で購入などという事態になり、多くの患者が自己負担を強いられています。十月からは七十歳以上の患者は、医療機関の窓口での支払いが定率一割負担（一定所得以上二割）が実施されました。一旦窓口で全額支払った後、自己負担限度額を越える部分が、払い戻される償還払い制度です。また、十月から入院期間が一八〇日を超えたら特定療養費化され、入院基本料の一部が保険から外され、その差額を患者から徴収して良いことになりました。その額は一ヶ月四〜五万円にもなります。当面五％の自費負担から段階的に十五％まで徴収されるというもので医療の基本部分に特定療養費制を導入することは、医療制度の根幹を否定するものです。「在宅酸素を中止した」「往診を断った」「緊急手術をすすめたが三日待つてほしいと来院した時は重態で腹膜炎を併発していた」などの状況が起こっています。

この様な事態に、勤医会及び東京民医連は、お金のあるなしで医療が受けられなくなる事を回避したいと願い、当面入院の差額ベットはもとより、透析患者の食事代、長期入院患者への入院基本料の差額などを徴収しないことにしました。

来年四月にはサラリーマンの窓口三割負担の実施、保険料も年収総額での引き上げとなります。さらに、年金の物価スライドの凍結解除による給付削減、介護保険料の見直し、雇用保険料の引き上げなど総額三兆二千四百億円にもおよぶ社会保障制度が改悪されようとしています。長びく不況、企業倒産のすすむ中で、ムダな公共事業を見直して、くらしの予算を充実させて経済と財政を再建していくことを多くの国民は望んでいます。私たちは、医療改悪の凍結、見直しを求めて運動しています。私たちは、解禁は二年延期され、財政構造改革法は九十八年に凍結されたままです。一緒に力を合わせてこの改悪を止めさせましょう。

先進国で社会保障への支出を減らしたのは日本だけ



編集後記

十月中旬、1科6期生の研修旅行に同行して中国を訪れた。盧溝橋の「中国人民抗日戦争記念館」では、日本軍の侵略の足跡が克明に記録され、中国の人々に加えられた残酷な行為が写真や資料として展示されていた。南京大虐殺や七三一部隊の残虐行為の写真にまじって、昭和天皇が軍服姿で指揮をとっている姿もあった。平頂山惨案遺跡では、三〇〇〇体におよぶ灰色遺骨が当時の「三光作戦」の無惨な爪痕を残している現実に、一同青ざめ声も無かった。

今、イラク問題でインド洋へのイージス艦の派遣を審議不十分のまま決め出港させてしまったり、次期通常国会で有事三法を強行採決しようとするなど、戦争の危険が及び寄ってきている。しかし、一方「アメリカがイラクを先制攻撃するのは間違っている。国連憲章にもとづく世界の平和秩序を守りぬこう」と、イラク攻撃反対の声も大きくなってきている。歴史の過ちを繰り返させないために、研修旅行の学びを深め実践していく時です。

（学校通信編集委員会）

深谷京子、机みどり、小澤清子